

〔研究ノート〕

## 地域の多様な主体の協働がつくる

### アクティブ・ラーニングプログラム「真間あんどん祭り」

#### —課題解決型学習および社会人基礎力育成のフィールドとして—

齊藤 紀子  
和田 義人

#### 1. はじめに

本稿は2015年度から2019年度まで本学人間社会学部 和田義人ゼミ・齊藤紀子ゼミが地域の多様な主体とともに取り組んだアクティブ・ラーニングプログラム「真間あんどん祭り」について、5年間の活動内容を総括し、課題解決型学習および社会人基礎力育成のフィールドとしての意義を整理することを目的としている。

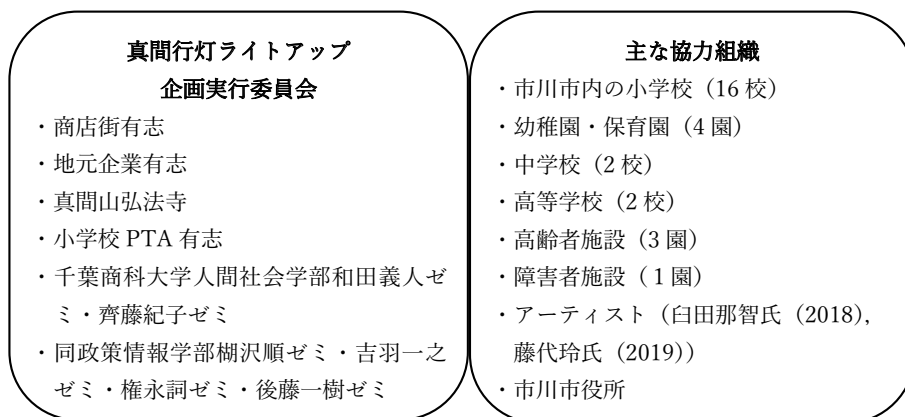
2020年早春より全世界的流行をみせた新型コロナウイルス感染症のため、同年7月開催予定だった「真間あんどん祭り2020」は中止を余儀なくされた。今後はコロナ禍での新たな生活様式のもと、従来の開催形式によらない形の模索が必要だが、当面はその見通しが立たない。そこで然るべき時機に新たなニーズをもとに検討を行うことが望ましいと考えて同プログラムはいったん区切りをつけるに至った。これまでのプログラム内容を総括してその意義を整理することにより今後の課題を明らかにするとともに、With コロナ／ポストコロナ時代の課題解決型学習および社会人基礎力育成活動の展望を描きたい。

#### 2. 真間あんどん祭りとは

「真間あんどん祭り」は、市川大門通り商店会で「肉の山崎」を営む二本松正利氏と市川市役所職員（当時）畑裕美子氏が市川市主催イベントの場で「商店街活性化、地域の景観向上のために何かできないか」との想いを共有したことから始まった。両氏の呼びかけに応じて2015年5月、商店街・真間山弘法寺・地域住民（小学校PTA関係者）・千葉商科大学人間社会学部の有志メンバーがはじめて参集、その後「真間行灯ライトアップ企画実行委員会」（以下、実行委員会）を組織し、定例会を開催して企画検討を重ねていった。そして地域子どもたち・保護者・大学生らによる手作りあんどんのライトアップを主軸としたお祭りとして、真間あんどん祭りを同年7月にはじめて開催した。以来毎年7月中旬開催となったこのお祭りは、近隣小学校、幼稚園・保育園、中学校、高等学校、高齢者施設、障害者施設、千葉商科大学政策情報学部およびアーティストなどの協力を得て、年々、内容も規模も拡充していった。

「真間あんどん祭り」の特徴は、コミュニティ内の世代間交流・まちの景観づくり・商店街来訪者の獲得を目指して、お祭り当日のみならず準備期間から地域の多様な主体が参

図1. 真間あんどん祭り実施体制 (2019年度)



画、協働し、産学官民の取り組みとなったことである。

実行委員会メンバーは、それぞれがもつ問題意識や目的のもと企画案を用意して提案し合い、合意の得られた企画案の実現に資するために提供可能なリソースを明らかにし、新たな参画メンバーへの趣旨説明や協力依頼を行った。

景観づくりの要となるあんどんの制作 (写真1) は、お祭り当日の2週間ほど前に、市川市内の小学校・幼稚園・保育園に通う児童とその保護者を中心として子どもから高齢者まで、世代も国籍も障害の有無も超えた多様な300人以上の人々が集い、世代間交流の場として実施された。

お祭り当日には、会場となる弘法寺境内に制作者自らがあんどんを設置し、カウントダウンに合わせてライトアップする参加型行事とした (写真2)。会場内には商店街店舗等による出店が10店舗以上並び、4,200人以上の来場者を迎えて、地域の子供たちやダンススクールの生徒さんによるダンスプログラムやライブ演奏が行われ、本学政策情報学部 Links・榎沢順ゼミ・権永詞ゼミによるプロジェクション・マッピングがクライマックスの時間を演出した。

このように企画・準備段階から当日運営まで多くの多様な主体・人々が参画し役割をもって創り上げる場として、「真間あんどん祭り」は市川市の新たな観光拠点と表現されるまでに発展した (表1)。

### 3. 課題解決型学習および社会人基礎力育成のフィールドとしての意義

「真間あんどん祭り」に大学有志メンバーとして教員・学生が参画したのは、このお祭りが課題解決型学習および社会人基礎力育成のフィールドとして価値があると考えたからに他ならない。溝上 (2016) は大学教育におけるアクティブ・ラーニングのひとつとして PBL があり、これは「問題解決学習 (Problem-based Learning)」と「プロジェクト学習 (Project-based Learning)」に類型化されると整理している。「問題解決学習」とは「実社会で直面する問題やシナリオの解決を通して、基礎と実世界とを繋ぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度などを身につける学習」 (溝上 2016, p8) であり、図2に示すス

表 1. 真間あんどん祭り (2015～2019) の開催実績

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
プロジェクト内容	2015年7月18日(土) 19:00～21:00 台風後の小雨 コア企画 ・市山立真間小学校ほか近隣小学校・幼稚園の児童・保護者、地域住民のみなさまとのあんどん作り ・真間山弘法寺内へのあんどん設置、ライトアップ ・店舗出店 ・浴衣着付 (商店街有志によるリサイクル活動の一環として)	2016年7月24日(日) 12:00～21:00 晴天	2017年7月23日(日) 15:00～21:00 晴天	2018年7月22日(日) 15:00～21:00 晴天	2019年7月21日(日) 14:00～21:00 晴天
派生活動	・秋のみじ祭り ・子供達のダンス ・チーパ君 ・盆踊り	・子供達のダンス ・ドローンによる記録映像の撮影～動画作成 ・動画上映会 ・院内学級、福祉施設との連携 ・チーパ君	・子供達のダンス ・ドローンによる記録映像の撮影～動画作成 ・動画上映会 ・院内学級、福祉施設との連携 ・プロジェクトアワードあんどん ・アワード大会 ・チーパ君、市川梨丸 ・協賛店舗と市川真間駅へのあんどん事前設置 ・国府台高校警道部との連携 (協賛あんどん名入れ) ・ピクチャーサイズ切り絵あんどん ・Bluetoothによる来場者数調査 (・写真撮影・印刷サービス (当日中止))	・子供達のダンス ・記録映像の撮影～動画作成 ・動画上映会 ・福祉施設との連携 ・本八幡宮から短期留学生との連携 ・メルカワあんどん製作～京成市川真間駅での展示 ・京成市川真間駅へのあんどん製作 ・巨大きらめきあんどん製作 ・プロジェクトアワードあんどん(巨大きらめきあんどん・租師堂) ・チーパ君、市川梨丸 ・ピクチャーサイズ切り絵あんどん (再利用) ・Bluetoothによる来場者数調査 ・フォトコンテスト～授賞式 ・写真撮影・印刷サービス (上映会時) ・ホームページ開設 ・「真間あんどん祭り」と同時開催される商店街主催「ほおずき市」における灯籠流しの準備	・子供達のダンス ・記録映像の撮影～動画作成 ・動画上映会 ・福祉施設との連携 ・本八幡宮から短期留学生との連携 ・メルカワあんどん製作～京成市川真間駅での展示 ・京成市川真間駅へのあんどん製作 ・巨大きらめきあんどん製作 ・プロジェクトアワードあんどん(巨大きらめきあんどん・租師堂) ・チーパ君、市川梨丸 ・ピクチャーサイズ切り絵あんどん (再利用) ・Bluetoothによる来場者数調査 ・フォトコンテスト～授賞式 ・写真撮影・印刷サービス (上映会時) ・ホームページ開設 ・「真間あんどん祭り」と同時開催される商店街主催「ほおずき市」における灯籠流しの準備
あんどんづくり参加者数	大人 49 子ども 93	198	217	247	307
あんどん数	110	122	136	250	272
協賛社数	—	35	27	29	23
参加店舗数	—	27	23	24	28
学生ボランティア数	3	6	10	10	12
来場者数	約40 約500	約150 約2000	約120 約2000	161 約2600	186 約4200
次年度への繰越金	¥125,040	¥9,389	¥307,488	¥556,870	¥561,107
記録映像 (動画) (撮影・編集: 政策情報学部福祉教授および学生達)	—	—	<a href="https://www.facebook.com/watch/?v=14903038047804">https://www.facebook.com/watch/?v=14903038047804</a>	<a href="https://www.facebook.com/watch/?v=26866223771173">https://www.facebook.com/watch/?v=26866223771173</a>	<a href="https://www.facebook.com/watch/?v=2393630194290176">https://www.facebook.com/watch/?v=2393630194290176</a>
受賞歴	—	—	—	・「社会人基礎力育成グランプリ関東大会」最優秀賞を受賞 ・市川市景観賞を受賞 ・あんどん祭り 2018 記録映像が「第 24 回市川イイネ！映像・cm コンクール」グランプリを受賞	—

写真1. あんどん制作



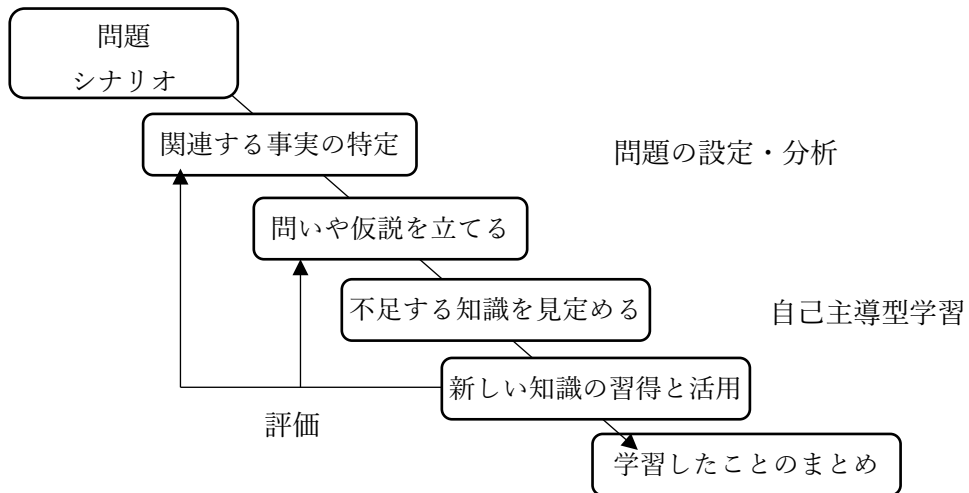
(撮影者) 松沢雅彦

写真2. あんどん祭り当日の弘法寺



(出所) 市川市ホームページ<sup>(1)</sup>

図2. 問題解決学習のステップとサイクル



(出所) 溝上 (2016) p. 9

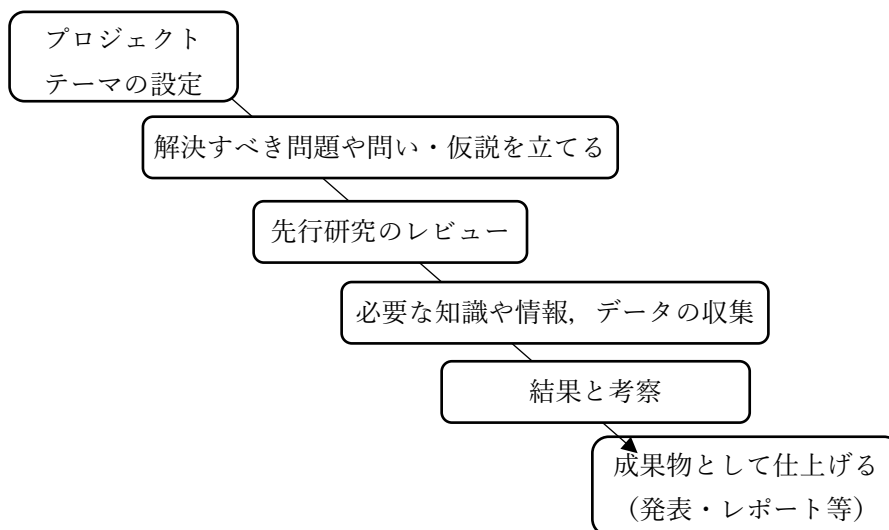
テップとサイクルを踏むとされる。

「プロジェクト学習」とは「実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習」(溝上 2016, p. 11)であり、図3に示すステップを踏むとされる。

「問題解決学習」と「プロジェクト学習」は、実世界の問題解決に取り組むこと、問題解決能力を育てること、解答が一つとは限らないこと、自己主導型学習を行うこと、協働学習を行うこと、構成的アプローチを採るなどの共通点が多く、類似しているという。しかし「プロジェクト学習」は問い・仮説を立てて先行研究レビューを行い、問題解決に必要な情報・データを調査・収集し、分析結果を踏まえて考察し、最終的には発表を行った

(1) 市川市「市川市景観賞第12回受賞者」<https://www.city.ichikawa.lg.jp/cit01/1111000047.html> (2020年11月11日確認)

図3. プロジェクト学習のステップ



(出所) 溝上 (2016) p. 11

りレポート等の成果物にまとめるという研究の手続きをとる一方、「問題解決学習」は問題解決のプロセスにおいて自己主導型学習や協働学習などの学習態度、問題解決能力を育てることを目指すとされる（溝上2016）。

これら2つのPBLのうち、「真間あんどん祭り」は「問題解決学習」の方に近いアクティブ・ラーニングプログラムであった。なお本稿では、社会的課題の解決をめざすアクティブ・ラーニングというコンセプトに基づき、「問題解決学習」ではなく「課題解決型学習」の表記を用い、実行委員会立上げ段階から参画した和田ゼミ・齊藤ゼミの学生の学びに絞って記述していく。地域活性化や地域共生社会づくり、社会的課題解決のための活動のマネジメントなどに関心を持つ両ゼミの学生達にとって「真間あんどん祭り」は、授業やゼミで得た知識をもとに、課題や目標を学生自らが設定し、大学周辺地域の様々な主体とともに具体的なプロジェクトに取り組むこと、それにより社会人基礎力（「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」）<sup>(2)</sup>を高めることのできるフィールドであった（図4）<sup>(3)</sup>。

### 3-1. 課題解決型学習のフィールドとして

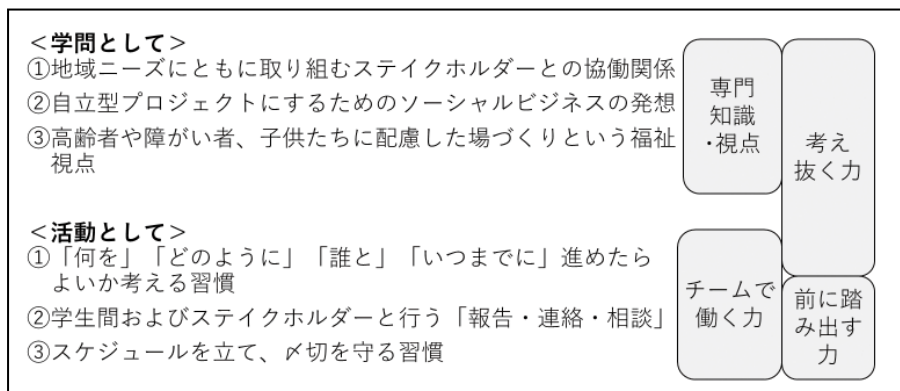
#### (1) 地域ニーズとともに取り組むステイクホルダーとの協働関係を学ぶ

学生たちは、なぜ「真間あんどん祭り」を行う必要があるのか、社会的課題およびニ-

(2) 経済産業省による「社会人基礎力」、2006年提唱。

(3) 「真間あんどん祭り」への取り組みを平成30年度「人生100年時代の社会人基礎力育成グランプリ」（主催：一般社団法人 社会人基礎力協議会、共催：経済産業省）において学生と教員が共同で報告した。本コンテストにおける評価指標は「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」がどれだけ成長したか、大学で学ぶ一般教養や専門知識をどれだけ深めることができたかというものであったが、関東地区大会では最優秀賞を獲得し、全国大会に出場して報告することができた。

図4. 学生たちが身につけた力



(出所) 平成30年度「人生100年時代の社会人基礎力育成グランプリ」全国大会報告資料

ズの発見からスタートする。実行委員会の定例会に出席して参加者の話を聴くことで、自分たちが協働関係を構築するステイクホルダーは一体誰なのかを認識するとともに、どのステイクホルダーがどのような課題を抱えどのようなニーズをもっているのかを理解していった。

まず最も重要なステイクホルダーを商店街メンバーと定義し、商店街のシャッター街化が進みつつあるという課題、集客を図りたい、商店街来店者間の顔の見える関係性を大切にしていきたいというニーズを知る。更に、弘法寺と地域の人々のより良い関係づくり(弘法寺のニーズ)、子供たちを中心とした世代間交流(小学校関係者のニーズ)、京成真間駅の利用客数増(京成電鉄のニーズ)、市民による地域の景観づくりの推進(市川市役所のニーズ)など、商店街以外のステイクホルダーがもつ様々なニーズも知る。実行委員会メンバーでありアートによる地域活性化を研究する権が指摘したように「商店街、市役所、大学、弘法寺、PTA、京成電鉄といった実行委員会を構成するメンバーは、このイベントにそれぞれ独自の目的を持って臨んでいる。全体として一つのイベントを実施する以上、意志の統一を図っていくことは必要になるが、目的を一つに限定する必要はないのだ」(権2020, p. 23)。

こうした体験を通して学生たちは、多様な主体が個別目的を持ちながらも、コミュニティ内の世代間交流・まちの景観づくり・商店街来訪者の獲得という全体目的を共有し、(2.で記述したように)各主体が真間あんどん祭りの成功に向けて資源を持ち寄り、役割をもち、分業する、協働の考え方や仕組みを学ぶこととなった。

## (2) 自立型プロジェクトにするためソーシャルビジネスの発想を養う

課題発見とニーズ把握の後は具体的方策としての企画案検討を行うことになるが、検討初期には学生たちから「有名アーティストを呼ぶ」「移動動物園を設置する」といった案も出てきた。しかし多くの地域活性化イベントにおいて資金難が活動継続を難しくする大きな要因となっていることを知ると、補助金などに頼らない自立型プログラムとして次年度を担う後輩に繰越金を残していくこと、継続的に毎年実施していくための財政基盤を築

くことを意識するようになる。そしてソーシャルビジネス<sup>(4)</sup>についての学びをもとに、社会性および財政的自立性を念頭に経営的視点をもって実現可能性の高い企画を立案するようになっていった。

初年度は手元資金0円からのスタートであったため、商店街店舗における募金活動のほか、クラウドファンディングへの挑戦、あんどんの材料となる木材や和紙などの制作キット販売を行った。クラウドファンディングについては、教員からの提案により購入型・寄付型かつ All or Nothing 型<sup>(5)</sup>の「Readyfor」を選定し、15万円を集めることを目的としてプロジェクトサイトを立上げた。真間あんどん祭りの目的や資金が必要な理由、本プロジェクトにかける思い、プロジェクト準備の進捗状況などを、実行委員会メンバーとの分担によりリレー形式で記事にまとめ投稿したり、それらを Facebook やメールなどで配信したりしたことで、一口2,000円あるいは5,000円という小口資金が少しずつ集まっていった。結果的に40日間ほどで183,000円の支援金を集めることに成功し、この経験から学生たちはクラウドファンディングというインターネットによる資金調達の方法と、活動にかける思いへの共感が市民と市民を繋ぐ資金提供のしぐみを学ぶことができた。

初年度で12万円あまりの繰越金を出すことができたこと、毎年クラウドファンディングに頼ることは難しいと考えたことで、次年度（2016年度）からは継続性を見込める収入の手立てを検討した。学生の発案と商店街の協力により、2016年度から協賛費<sup>(6)</sup>・店舗出店費の徴収をはじめ、2017年度からは商店街店舗の販売サポートを学生が行うことで売上の一部（あるいは全部）を実行委員会の収入とするスタイルが確立していった。その結果、表1にあるように5年間、次年度のための繰越金を残すことができた<sup>(7)</sup>。

### (3) 高齢者や障害者、子供たちに配慮した場づくりという福祉視点をもつ

地域共生社会やインクルーシブな場づくりの重要性についての学びにより、学生たちは「真間あんどん祭り」を年齢や障害の有無、国籍などにかかわらず誰もが参加し楽しむことができる場にすることを大切にようになっていった。

あんどん制作日には多くの親子が参加し、親子の会話を楽しみながら制作に取り組んでいたが、ときには子どもが一人で作業する光景も見られた。そうした場合には子どもにそっと近づき、子どもの目線に合わせて話しかけ、一緒に作業を行う学生の姿が毎年見られた。

あんどん祭り当日には、階段あるいは坂道を上って会場に足を運ぶことが難しい高齢者に配慮して、階段や坂道に並べられたあんどんを鑑賞できるような鑑賞スペースを設けたり、そのためのあんどん設置プランを立てたりという工夫を凝らすようになった。また白

(4) 現代社会が直面する多様な社会的課題（高齢化問題、環境問題、子育て・教育問題など）の解決に取り組むビジネス。社会性・事業性・革新性という3つの要件を有する（谷本2006）。

(5) Readyfor「クラウドファンディングの種類」および「クラウドファンディング」の実施方式 <https://readyfor.jp/crowdfunding/>（2020年12月28日確認）

(6) 子供たちが作るあんどんよりも大きなサイズのあんどんを用意し、協賛者の社名／店舗名を名入れし、お祭り当日、来場者の目をひく弘法寺仁王門前に設置するというもの。この協賛者用あんどんは弘法寺より竹（廃材）の提供を受け、本学近隣地域にて竹細工房を営む襟川氏より指導を受けて実現した。

(7) 2019年度活動後の繰越金は、コロナ禍における商店街振興策に資するため、2020年11月以降、実行委員長二本松正利氏に管理・活用をお願いした。

杖について会場に来られた来場者を見つけて、あんどんに灯った明かりの様子を言葉で伝えた学生、近隣病院の院内学級に在籍する児童のために当日来場できない本人に代わって写真撮影した学生がいるなど、学生ひとりひとりが多様な人々とのかわりの中で自ら判断しできることを考えて行動を起こす事例が増えていった。

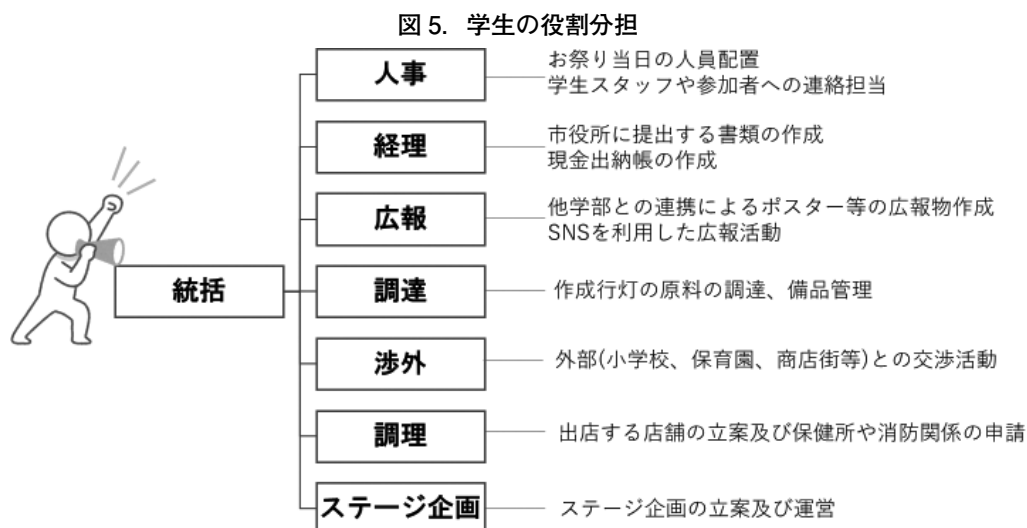
### 3-2. 社会人基礎力育成のフィールドとして

#### (1) 「何を」「どのように」「誰と」「いつまでに」進めたらよいか考える習慣を身につける

本プログラムを通して育成したい人物像は「何が求められているか、何ができるか考え抜き、多様なステイクホルダーとの議論・調整によって合意形成・目標設定・企画実行ができる人物」というものであった。こうした人財育成を目指して、本プログラムでは8チーム（統括／副統括、人事、経理、広報、調達、渉外、調理、ステージ）から成る組織づくりおよび各自の特技などを活かした役割分担を行い、「何を」「どのように」「誰と」「いつまでに」実施するのか考え、各自が責任をもって役割を果たすことを求めた（図5）。

例えば近隣小学校・幼稚園をはじめとした市川市在住市民にあんどん制作を呼びかけるにあたっては、お祭り当日から遡ってあんどん制作日を決め、あんどん制作への参加申込期間を十分に確保した日程で案内を行う必要がある。そうしたスケジュールはまずゼミ全体で検討してから実行委員会に諮り、あんどん制作会場となる教室を予約する。それから広報チームはチラシに掲載すべき項目を決め、政策情報学部吉羽ゼミにチラシデザインを依頼する。チラシデザインの校正作業と同時並行で、経理チームは複数の印刷会社ウェブサイトと比較検討してチラシ印刷費を見積もり、印刷発注の準備を進め、請求書を受け取り振込を行う。渉外チームはチラシ配布先をリストアップし、チラシ納品後には広報チームの応援を得てチラシの仕分け・梱包・郵送作業を行い、郵送費については経理チームと精算を行う。

このように「何を」「どのように」「誰と」「いつまでに」進めたらよいか検討し自分お



(出所) 平成30年度「人生100年時代の社会人基礎力育成グランプリ」全国大会報告資料



よび自チームのタスクを実行することで、考える習慣を身につけていった。

## (2) 学生間で／ステイクホルダーと「報告・連絡・相談」を行う

上記(1)で示したようにタスクを実行していくには、チーム内およびチーム間そして実行委員会などステイクホルダーとの「報告・連絡・相談」が欠かせない。学生たちは活動を進める中でしばしば連携相手から「私はその案件について聞いていなかったので準備ができていない」と言われてしまう事態に直面し、情報共有の重要性を痛感することとなった。自チームのタスクを実行するために、どのタイミングで誰にどのようにコミュニケーションを図る必要があるのか、「伝えつつも」を避けるために試行錯誤を重ねていった。

例えば学生間では日常的なコミュニケーションツールとなっていたオンラインツールのLINEも、学生以外のステイクホルダーには馴染みがないかあるいは使用していても学生ほど多用していなかった。そこでLINEグループにメッセージを送っただけでは、伝えるべき相手はすぐにはメッセージを読まない、当該グループに入っていないなどの問題により伝わっておらず、「連絡したつもり」に留まっていた。こうした失敗を経て、相手が忙しい時間を避けて電話をかける、あるいはアポイントメントを取って会いに行き対面で話をする、そのためには連絡／相談事項を予め議題としてとりまとめる、打合せが一回で済むように関係者が同席するという対応をとるようになっていった。こうして学生たちは、伝えるべき相手に時間的余裕をもって確実に伝わる手段を選定してコミュニケーションを図り、相手に伝わったことを確認するようになっていった。

また丁寧にコミュニケーションを図っていても、連携相手と意見が対立すること、役割分担について合意が得られないこともあった。とくにコスト面で折り合いがつかないことや、互いが業務／授業の合間を縫って作業を行うことが必要となることについては、実行委員会で合意の得られた方法やスケジュールを変更する必要に迫られたり、メンバーのモチベーション低下を招いたりすることもあった。そうした場合には連絡担当者だけが抱え込むのではなく、まずはチーム内で報告・相談すること、教員に相談すること、必要に応じて教員が話し合いの場に同席・仲介することによって、遅滞を最小限にするようになっていった。

## (3) スケジュールを立て、〆切を守る習慣をつける

お祭り当日までには全ての準備を終えなければならないため、スケジュールを立て、to do リストを作り、進捗確認を行うことはゼミでの最重要事項となった。年度によって異なるが例えば2019年度については和田ゼミ・齊藤ゼミのゼミ生は40人あまりおり、履修科目が異なるゼミ生全員が一同に会する機会をゼミ時間以外に確保するのは簡単なことではない。そこでゼミ時間は情報共有・相談・意思決定を行う重要な場となり、時間内に終わらない作業は別途チームごとに集まり対応する、という時間の使い方が生み出されていった。

ゼミ時間中には統括・副統括からスケジュール表とto do リストが示され、いつまでにどのチームが何を進めるべきか、予定通りに作業が進んでいるか、念入りに進捗確認が行われ、その議事メモが学生間で共有された。何らかの問題により遅れが発生していることが明らかになれば、スケジュール修正を図ったり、他チームから応援を得て遅れを取り戻

したりといった対応がとられるようになっていった。こうしたピアプレッシャーおよびピアサポートも得て、大切を守る習慣が学生たちに定着していった。

#### 4. 今後の課題

アクティブ・ラーニングプログラムとしての「真間あんどん祭り」は、課題解決型学習および社会人基礎力育成のフィールドとして学問上も実務上もチャレンジングな成長の機会を学生たちに提供してきたが、今後の課題も発見することとなった。

まず1つ目の課題として、学生たちの問題意識や課題解決への取り組み意欲が高ければ高いほど、本来活動の中心的存在となるべき主体（真間あんどん祭りであれば商店街や地域住民の方々）が会議での発言において遠慮したり、学生たちに活動を委ねたりしてしまうことが挙げられる。それは学生たちにとって過剰な負荷となったり<sup>(8)</sup>、地域ニーズを見失って地域活動のはずが学生活動に変わってしまったりする危険性すらある。活動規模が拡大し協働参画主体が増えるほどに、各主体のもつニーズを把握し直すとともに全体目的を振り返る機会をもつこと、中心的存在となる主体によるイニシアティブを強化する必要があると考えられる。

2つ目の課題としては、地域活性化という言葉があまりにも広範に多義的に使われるようになっていいるいま、実際にどうなれば地域が活性化したと言えるのか、十分に論点整理および議論を尽くさないままに取り組みに着手すると、ステイクホルダー間で目標設定にずれが生じ十分な成果を出せない可能性があることが挙げられる。小川(2013)によれば、1980年代初頭から今日までの社会・経済環境の変化にともない、地域活性化は「経済的活性化」と「社会的活性化」という2つの意味をもつようになっている。経済的活性化の目指すところは産業発展、雇用先増、定住増などの経済的効果であり、社会的活性化の目指すところは住民交流、住民の声、賑わい、活気などの社会的効果とされる。どちらを重視するかが世代や所属セクターによって異なるため、たとえ「地域活性化」という共通目的を設定しても、当該プログラムに関わる主体によってその定義や目標が異なり、活動の進め方において混乱が生じたり、成果の評価も食い違ったりする可能性がある。

小川(2013)の議論を参考に「真間あんどん祭り」の取り組みを検証してみると、協働

表2. 真間あんどん祭りの社会的効果と経済的効果に関する検証結果

真間あんどん祭りの全体目的	地域活性化としての目標	評価指標	成果	活性化の効果
・コミュニティ内の世代間交流 ・まちの景観づくり	社会的効果 (住民交流、賑わい創出など)	・あんどん制作者数 ・お祭り当日の来場者数 ・あんどん個数	増加	有
・商店街来訪者の獲得	経済的効果 (商店街来訪者の獲得や商店街の発展など)	検討不十分	測定 不可	判断 不可

(出所) 筆者作成

(8) 学生の中には奨学金返済のために欠かせないはずのアルバイトの時間を削って作業時間に充てたり、授業中に本プログラムのための資料作成をしたりしたケースがあった。ゼミ指導教員として学生の負荷管理が徹底していなかったことにつき反省している。「真間あんどん祭り」に限らず、アクティブ・ラーニングプログラムの実施においてこうした事態を招かないよう改善を図りたい。

主体間で実際にどうなれば地域が活性化したと言えるのかという議論を尽くし共通理解を形成していたとは言いきれず、それ故、測定可能で協働主体間で共有されていると位置づけられる成果を十分に示すことができない。具体的には、全体目的のうちコミュニティ内の世代間交流およびまちの景観づくりは社会的活性化を、商店街来訪者の獲得は経済的活性化を目指したものと整理したうえで、住民交流や賑わい創出といった社会的効果はあんどん制作者数・お祭り当日の来場者数の増加にみることで、商店街来訪者の獲得や商店街の発展といった経済的効果は見出すことができない。

地域活性化の取り組みにあたっては、全体目的を設定するにあたり実際にどうなれば地域が活性化したと言えるのか協働主体間で議論を尽くし、具体的目標と評価指標の設定・測定まで行うことが必要であろう。

## 5. With コロナ／ポストコロナ時代の課題解決型学習・社会人基礎力育成活動の展望

2025年を念頭に進められてきた社会保障・税一体改革は一応完了となり、未来を見据えた議論が必要になっている。そうした流れの中で国が掲げる理念が「地域共生社会」の実現である。しかしながら、地域住民が主体となって作り上げてきた様々なイベントや世代間の繋がり・交流機会が新型コロナウイルスによってリセットされ、人々の暮らしそのものを大きく変えてしまった。公的なサービスですら“距離を置く”対応になり、地域に孤立化が進行してしまった。だからこそ、あらためて住み慣れた地域で、地域に暮らす地域住民が共に支え合う地域社会を再構築する必要がある。

従来の福祉の仕組みは、医療、介護、障害者、子ども、それぞれが対象者ごとに相談窓口やサービスが縦割りに分かれていた。ところが昨今、複合的な課題を抱える家族が増えており、新型コロナウイルスの影響はその流れを加速化させている。また、人生100年時代を迎え、身体機能が弱って、買い物、ごみ捨て、掃除、料理など、公的福祉サービス対象外の支援が必要な人も増えている中で、サービスの停止はそうした方々の生活に大きなダメージを与えてしまった。今後、少子高齢化が進む中、支援を必要とする高齢者は増え続け、担い手となる現役世代は減る一方である。さらに、コロナ禍で財政的にも厳しい我が国において、公的な福祉サービスをさらに充実させる事は難しい。そうした中だからこそ、「地域共生社会」という考え方があらためて重要になっている。

ここで大事な事は、地域共生社会の実現に向けて、主軸となる考え方は「福祉の領域だけではない」という事だ。従来の縦割り発想から脱却し、福祉の領域だけでなく、人・分野・世代を超えて、「モノ」「お金」「思い」が循環し、相互に支える・支えられる関係が不可欠である<sup>(9)</sup>。「真間あんどん祭り」においても必要となったように、様々な主体の参画のもと個別のニーズ・思いをもちつつ全体目的を設定して協働で取り組みを進めていくこと、財政的自立性を確保し持続可能な取り組みとしていくことが不可欠であろう。「地域共生社会」とは、制度・分野ごとの縦割りや「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が我が事として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超

(9) 平成29年12月12日厚生労働省子ども家庭局長、社会・援護局長、老健局長連盟通知

えて丸ごとつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会である<sup>(10)</sup>。政府は改革の方向性の大枠に次の2点をあげている：

- ①公的支援の「縦割り」から「丸ごと」への転換
- ②「我が事」・「丸ごと」の地域づくりを育む仕組みへの転換

「真間あんどん祭り」では、2015年から2019年までの5年間を通じ、地域住民が主体となり、行政、企業、商店街、学生と一緒に「地域共生社会」実現に向けた先駆的なチャレンジが実践されたと評価できる。平成が終わり、新たに令和がスタートした。そして新型コロナウイルスによる大きなダメージを考えると、我が国の未来は決して楽観視できるものではない。しかしながら、“未来”は充てがわれるものではなく、自ら創り上げるものである。だからこそ、未来に向けた基本的なものの考え方、処理の仕方（基底概念）の中心軸が大事なのであり、大学教育の一環としてこうした課題解決型学習・社会人基礎力育成活動に取り組むことの意義は今後増していくだろう。

「地域共生社会」の実現が、地域の未来ビジョンとして位置付けされ、それぞれの地域であらためて地域住民すべてが主体となり、新たな支え合いの文化が醸成されることを望みたい。そして「真間あんどん祭り」が残してくれたレジェンド（たすき）を継承する新たな地ならしと種まきを地域の方々、子どもたち、学生たちと一緒に模索して行きたいと思う。

## 謝辞

「真間あんどん祭り」は地域のみなさまとともに取り組む貴重な学びの場であった。実行委員会メンバー各位、市川市役所景観整備課、市川市内小中学校・国府台高校、真間あんどん祭りに参画くださった地域住民のみなさま、政策情報学部棚沢ゼミ・吉羽ゼミ・権ゼミ・後藤ゼミ・Linksメンバー、人間社会学部の教職員、人間社会学部和田ゼミ・齊藤ゼミの1期生、2期生、3期生、4期生、5期生及び当日ボランティアとして運営を担ったボランティアメンバーのご尽力・ご協力にこの場を借りて御礼申し上げたい。

## 〔参考文献・資料〕

- ・市川市「市川市景観賞」<https://www.city.ichikawa.lg.jp/cit01/1111000047.html> (2020年11月14日確認)
- ・小川長 (2013) 「地域活性化とは何か—地域活性化の二面性」『地方自治研究』Vol. 28, No.1, pp. 42-53
- ・経済産業省「社会人基礎力」<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2020年9月30日確認)
- ・権永詞 (2020) 「集客メディアとしてのアート：「真間あんどん祭り」への導入例における可能性と課題」『国府台経済研究』, 第30巻第2号, pp. 3-24.
- ・谷本寛治編著 (2006) 『ソーシャル・エンタープライズ—社会的企業の台頭』中央経済社

(10) 平成29年2月7日厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部会議資料

- ・平成 30 年度「人生 100 年時代の社会人基礎力育成グランプリ」全国決勝大会 千葉商科大学人間社会学部人間社会学科報告資料「心を近づける 真間あんどん祭り」
- ・真間あんどん祭りウェブサイト <https://ichikawamamaandon.wixsite.com/matsuri> (2020 年 9 月 30 日確認)
- ・溝上慎一(2016)「アクティブラーニングとしての PBL・探究的な学習の理論」溝上慎一・成田秀夫編『アクティブラーニングとしての PBL・探究的な学習』東信堂, pp. 5-23
- ・Readyfor「子どもたちの手づくり行灯でライトアップイベントを開催したい!」<https://readyfor.jp/projects/light-up> (2020 年 11 月 14 日確認)
- ・和田義人 (2020)「少子・高齢化社会」小山望・勅使河原隆行・内城喜貴監, 日本共生社会推進協会編『これからの「共生社会」を考える』福村出版, pp. 39-55

(2021.1.12 受稿, 2021.2.18 受理)

〔抄 録〕

2015～2019年度まで本学人間社会学部 和田義人ゼミ・齊藤紀子ゼミが地域の多様な主体とともに取り組んだアクティブ・ラーニングプログラム「真間あんどん祭り」は、コロナ禍においてその活動に区切りをつけることとなった。本稿は5年間の活動内容を総括し、課題解決型学習および社会人基礎力育成のフィールドとしての意義を整理したものである。

課題解決型学習のフィールドとしては、(1) 地域ニーズとともに取り組むステイクホルダーとの協働関係を学ぶ、(2) 自立型プロジェクトにするためソーシャルビジネスの発想を養う、(3) 高齢者や障害者、子供たちに配慮した場づくりという福祉視点をもつ、という意義が認められた。社会人基礎力育成のフィールドとしては、(1) 「何を」「どのように」「誰と」「いつまでに」進めたらよいか考える習慣を身につける、(2) 学生間で／ステイクホルダーと「報告・連絡・相談」を行う、(3) スケジュールを立て、メ切を守る習慣をつける、という意義が認められた。

こうした意義と今後の課題を示し、With コロナ／ポストコロナ時代の課題解決型学習および社会人基礎力育成活動の展望を描いた。